

限られたヒトにしか話さなかったが、実はずっと秘めた思いがあった。

コレから先の、ず～っと遠い将来、のんびりと時間を過ごす生活が訪れたとき  
いつの日にかそんな日がきたなら。

イタリアに移住したい。そんなコトを漠然と夢に描いていた。  
何故イタリアなのか？ 理由はいたって単純なのである。  
「ヨーロッパでメシのウマが合うところ。」  
もっとも、他にもイタリアという国に対する、漠然とした憧れがあった。  
芸術、美術、モータリゼーション、民族性、などなど。

こんなことを、つい数年前まで、将来の道の選択肢として結構真剣に考えていた。  
まだ、実際にイタリアに足を踏み入れる以前の話である。

時は過ぎ、元外資系フライトアテンダント、Yちゃんとこんなことを話した。

Y: 「イタリアってホントに素敵よねえ、やっぱり住みたいと思う？」

S: 「う～～ん、それは無いね。」

実際にイタリアに行き、目で見て、耳で聞いて、肌で感じて、そして知ったのである。  
イタリアという国は、本当に素晴らしい。・・・およそ感じ得る全てのモノが卓越している。  
だからこそ、私はイタリアへの移住を諦めざるを得なかった。

目的があって一時的に滞在するのと、その場所に定住する、のとは決定的に意味合いが異なるのだ。

鏡を見たとき、そこに映るのは日本人である自分自身の顔だ。  
その自分が、あの美しい場所に溶け込めるだろうか、馴染めるだろうか。

ドウォーモにたたずんでみても、そこには日本人の自分が居るのであって、地元人の自分ではないのだ。そして、その美しい瞬間に歪みを生むであろう、その存在に耐えられない。  
日本人がラップやヒップホップ音楽をどんなに模倣しても、技術的に高くても、しっくりこない。  
英語の歌を日本人が歌っても、大抵、気持ちは伝わらない。

「自分があの美しいバランスを壊すのが嫌だから、だから住めないよ・・・。」  
「アソコは、こっちから出掛けて訪れる場所で、生活する所じゃないと思う。」

勿論、美しく、良い所ばかりではないだろう。生活していれば、嫌でもあらゆる場面に遭遇する。  
それに気付きたくない。ネガティブな面を見たくない。  
逆に言えば、自分はやはり日本人であって、どこまでも日本人として振舞いたい、という  
エゴイズムの一種なのだろうか。

その気持ちに気付いたとき、イタリアには行きたい、と思っても、住みたい、とは思わなくなった。  
いつか、国境を越え、さらに自分自身の国籍さえも小さく感じ得るほどの地を発見できるだろうか？  
いまの所、自分にとって、結局は京都が一番。なのである。

もっとも、他府県のヒトには住みにくく、なかなか馴染めない土地柄だろうけどね。 笑

(12Aug,03)

